

令和 2 年 5 月 30 日現在

機関番号：37111

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02948

研究課題名(和文)複合動詞の習得における母語の影響の解明：中国語・韓国語・英語母語話者を対象に

研究課題名(英文) A Study on the Influence of L1 on L2 Acquisition of Japanese Compound Verbs by Chinese, Korean, and English-Speaking Learners of Japanese

研究代表者

庄村 陽子(一瀬陽子)(Shomura-Isse, Yoko)

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：30368881

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は母語話者の言語知識が第二言語習得に与える影響の解明を目的に、以下の2点に関する研究を行った。1つはまだ解明の進んでいない「複合動詞」の第二言語習得調査を通して、中間言語において母語の影響が反映されやすい領域と発達上の誤りが出現しやすい領域とを明らかにすること、2つ目はデータ収集の手法の違いでデータ自体の信頼性、妥当性に違いは出るのかという問いを解明することである。前者に関して複合動詞の自他の習得には単純動詞の習得が不可欠であり、日本語複合動詞の学習上の普遍的な発達順序が存在する可能性が示唆される結果が得られた。後者に関しては非対面式調査方法の可能性や妥当性が新たに示されることとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義の1つは中間言語において母語の影響が反映されやすい領域と、発達上の誤りが見られやすい領域との解明への寄与にある。その社会的意義としては、研究結果が、より効率的な言語習得へ示唆をもたらしたことにある。母語の異なる学習者に同一の学習法を強いるのではなく、研究で得られた示唆を活かすことで、より科学的な学習法や教授法を実践することができる。また、今回は研究手法に関する研究も行い、対面式とクラウドソーシング等の非対面式との間でデータの信頼性、妥当性に差があるかを調べた。その結果、非対面式の調査法は、疫病の流行等の際に代替手法として有効であることを示すことができた。

研究成果の概要(英文)：This project focuses on the influence of the first language(L1) on second language(L2) acquisition, with specific attention on the study of compound verbs in L2 Japanese. The purpose of the project is twofold. First, it aims to clarify where the influence of L1 and developmental errors are likely to be detected and the areas in which they are likely to occur in the interlanguage.

Second, it aims to verify whether different data collection methods might affect the reliability and validity of the data. One of the most interesting results regarding the former is that the acquisition of single verbs is indispensable for the acquisition of compound verbs.

Our results also suggest that there might be a universal developmental order in Japanese compound verbs acquisition. With regard to our methodological research question, our findings suggest the possibility and validity of the non-face-to-face survey method.

研究分野：第二言語習得研究

キーワード：第二言語習得 中間言語 母語の影響 複合動詞 実証研究

1. 研究開始当初の背景

第二言語習得研究の役割の1つは“言語経験が貧弱でも獲得可能な普遍的特質と、学習段階の最後まで獲得が困難な領域を明らかにすることである”(遊佐 2013:89)。本研究が対象とするのは前者である。近年「複合動詞」に関する議論の高まりが見られ、「複合動詞」を有するとされる中国語、韓国語、トルコ語など様々な言語でその研究が盛んに行われている。しかし、第二言語習得研究分野においては自他交替に関する研究に比べ複合動詞の習得研究に関しては、まだ解明の進んでいない部分も多く、言語間の差異が習得にどのような影響をもたらすのかという疑問の解明に至っていない。つまり自他交替のような単一の動詞で用いられる場合と、複合動詞(例:「食べ始める」)のように前項動詞と後項動詞の組み合わせで用いられる場合とでは学習者の振る舞いにどのような違いが見られるかという問いに関する実証的な検証はまだ不十分である。

2. 研究の目的

大きく分けて2つの目的のもと、実証研究を行う。1つはまだ解明の進んでいない「複合動詞」の第二言語習得調査を通して、中間言語において母語の影響が反映されやすい領域と発達上の誤りが出現しやすい領域とを明らかにすることである。複合動詞は一見すると2つの動詞の組み合わせに過ぎないようだが、上級の日本語学習者にも誤り(例:「吸い始まる」)が表れやすく、習得が困難な文法項目だとされる。森田(1978)によると、学習者が日本語を学ぶ場合、教科書によって与えられる動詞の大半は単純動詞であり、それらの動詞を組み合わせた複合動詞についてはほとんど学習の機会が無い。それ故に明らかにすべきことは、母語の異なる日本語学習者が複合動詞のどの点に困難を見出すのか、そしてどのようなプロセスまたは中間言語を経て日本語話者と同じような複合動詞を産出できるようになるのかを探る必要があると考えた。これらを解明していく上で、まず必要とされることは学習者の母語における「複合動詞」の日本語との類似点や相違点などを入念に整理することである。言語間の差異について具体的に述べると、今回の対象項目である日本語の複合動詞は、その言語学的な観察事実から語彙的複合動詞と統語的複合動詞とに大別される(影山 1993)。具体例を挙げると、「切り倒す」のような語彙的複合動詞はV1の連用形とV2とが直接併合したものであるのに対して、統語的複合動詞は「食べ続ける」のようにV2がV1を主要部とする動詞句(VP)を補部に取りものである。日本語や中国語にはそれら両方の複合動詞があるとされているものの、韓国語には語彙的複合動詞のみが存在し、英語にはそのどちらも存在しないとされる(表1参照)。

表1. 各言語における複合動詞の種類

	日本語	韓国語	中国語	英語
統語的複合動詞	あり	なし	あり	なし
語彙的複合動詞	あり	あり	あり	なし

(Hokari, Kumagami and Akimoto 2012: 162 を基に作成)

次に2つ目の目的は、対面式の調査が実施できない際に、「クラウドソーシング」というオンラインでの調査が代替手段となり得るか、といった問いに対して実証的な検証を試みる。

研究1: 韓国人日本語学習者による統語的複合動詞の習得

各々の韓国人日本語学習者が有する中間言語(interlanguage)を統語的複合動詞の観点から解明することである。具体的には、本研究では(1)に示す研究課題に取り組む。

- (1) a. 「ている」とは関係なく、進行相の方が完了相よりも正答率が高いのか。
- b. 韓国人日本語学習者の産出課題や理解課題において、負の転移(VP1を名詞化させたり、副詞を使用したりする傾向)が観察されるのか。
- c. 韓国語日本語学習者において統語的複合動詞のV2の自他の誤用が観察されるのか。

3. 研究の方法

被験者は東京都にある専門学校に在籍する韓国語を母語とする日本語学習者48名を対象とし、統制群として日本の大学に通う19歳から20歳の日本人24名に同じ調査を実施した。まず習熟度テストの結果を基に、韓国語母語話者をそれぞれ上位群と下位群に分けた($p < .001$)。本実験を行う前に「自他の区別に関するテスト」も実施した。「複合動詞を正しく作り出し、文を完成させられるか」という問いに答えられるかどうかは次に示す2つの前提の上に成り立っている議論だからである。第一に、複合動詞の自他の区別に関する議論よりも前に、単純動詞の自動詞と他動詞の区別ができているかどうかという点である。第二に、格助詞と自動詞ないし他動詞を正しく組み合わせられるかどうかという点である。

4. 研究の成果

4.1 産出テストの結果

結果として特筆すべき点は、韓国語母語話者において母語である韓国語の影響がはっきりと表れたことが挙げられる。具体的には調査前の予測通り、「副詞+動詞」型の誤りが下位グループに多く観察された。さらには、単純動詞の自他の区別ができない学習者は複合動詞でも自他の組み合わせを間違え傾向が観察された。つまり、単純動詞の自他の区別ができないにもかかわらず、複合動詞の自他の組み合わせを間違わず正しく産出できた被験者はいなかった。このことから、複合動詞の自他の習得には単純動詞の習得が不可欠であり、日本語複合動詞の学習上の普遍的な発達順序が存在する可能性が示唆される結果となった。

4.2 文法性判断タスクの結果

統制群は名詞化よりも複合動詞を高く容認するのに対して、上位群と下位群ともに複合動詞をあまり容認せず名詞化を容認する傾向があることが分かった。このことから、(1b) に示した研究課題に対して、韓国人日本語学習者はVP1の名詞化を好む傾向があると言えそうである。

また、韓国人日本語学習者は日本語複合動詞を習得する際、アスペクトを表すV2(終える、続ける、始める、かける)、すなわち、V1を構成する動詞句にアスペクトを付け加えることで作られる複合動詞の容認度が高い。この事実はV2がアスペクト動詞の複合動詞を早い段階で習得していることが示唆される。なかでも、V2が「始める」と「続ける」と「終える」の複合動詞は上位群と下位群ともに正しいと回答しているが、「終える」の容認度は他の2つよりも高くない。このことから、(1a)の研究課題に対して、韓国人日本語学習者は進行相(「続ける」)(と起動相(「始める」))の方が完了相(「終える」)よりも容認されると考えられる。

この結果は、日本語学習者がアスペクトを習得する際、進行相の方が完了相よりも正答率が良いとする「ている」を用いた許(2005)とSugaya and Shirai(2007)の研究結果とも合致する。重要なのは、本研究の帰結は「ている」「続ける」「終える」という形式は関係なく、それが表す意味、すなわち、進行相と完了相が習得に大きく関係していることを示していることである。その点において、進行相の方が完了相よりも正答率が良いことは日本語学習者が持つ中間言語全般に見られる現象の1つである可能性がある。

以上の考察から、次のようにまとめられる。

- (2) a. 日本語学習者は、V2が語彙範疇の場合には名詞化を好む
(=VPを2つ連ねるのを回避する)。
- b. 日本語学習者は、V2がアスペクト動詞の場合には複合動詞も容認する
(=VPは1つであり、そのVPにアスペクトの意味を付け加える)。

本研究では、日本語と言語的距離が近い韓国語を母語とする日本語学習者に対象を絞り、日本語学習者の中間言語の解明に取り組んだ。具体的には、統語的複合動詞の習得には連用形の習得(第一段階)、V2の自他の習得(第二段階)という順序があると提案した。さらに、統語的複合動詞のV2の自他を誤用することも日本語学習者全般に見られる現象の1つである可能性を高めた。

研究2: 日本人英語学習者による結果構文の習得

本研究ではSnyder(2001, 2012)が提唱する複合パラメータが、日本人が英語を習得する際にもはたらくのかどうか検証することを目的としている。先行研究では、英語と日本語の違いにより、日本人英語学習者は強い結果構文を弱い結果構文よりも習得しにくいと予測し、検証が試みられている。具体的には、Yotsuya et al.(2014)は強い結果構文も弱い結果構文も関係なく同程度に容認されると報告している。柳澤(2013)は結果構文を正解できるかどうかは強い結果構文か弱い結果構文かどうかは関係なく、例文の中に結果述語が形容詞で表されているか前置詞を伴う結果句で表されているかであると報告している。それに対して、平野(2016, 2017)は弱い結果構文を強い結果構文よりも容認しやすいと報告し、迂言的表現に関して平野(2017)は、日本人英語学習者はTom made the metal flat by hammering it.のような迂言的表現を結果構文よりも好むが、英語母語話者はそれを好まない傾向にあると報告している。

このように、強い結果構文と弱い結果構文の習得に違いがないとする立場と違いがあるとする立場があるが、どちらの立場の報告結果が妥当なのかは決着がついていないのが現状である。これまでも結果構文の習得研究は行われているが、その先行研究はすべて日本語には強い結果構文がないため強い結果構文の方が弱い結果構文よりも習得が容易ではないという母語の転移(L1 Transfer)が観察されるかどうかを調べているに過ぎない。つまり、これまでの英語結果構文に関する第二言語習得研究では、得られた研究結果が何に起因しているのかを説明することは困難である。

3. 研究の方法

本研究では、強い結果構文が英語にはあるが日本語にはなく、弱い結果構文が日本語と英語の両方にあるという言語事実に対して原理とパラメータのアプローチの観点から説明を与えているSnyder(2012)を援用し、複合パラメータが英語結果構文の習得に関与していると言えるかどうか検証を試みる。具体的には、原理とパラメータのアプローチから結果構文に関する日本語と英語の相違を説明すると、弱い結果構文は複合パラメータと関係している。したがって、

次のような仮説が立てられる。

- (3) 日本人英語学習者による結果構文の習得に関する仮説
- a . 弱い結果構文の習得の方が強い結果構文の習得よりも容易である。
 - b . 英語の弱い結果構文と英語の複合名詞の容認度には相関がある。

Snyder による提案が正しいと仮定すると、日本語も英語も TCP はプラスに設定される。日本人英語学習者はパラメータを設定し直す必要がない。したがって、(3a) の仮説が立てられる。次に、(3b) は、弱い結果構文と複合名詞が TCP という点で関係しているという Snyder (2012) が提案していることが正しいと仮定すると、弱い結果構文と複合名詞の習得には相関があると予測される。これらの仮説と予測が正しいかどうかを検証する。

(3) の仮説が正しいかどうかを検証するために、本稿では容認性判断課題を行った。参加者には絵を見せ、その絵の下に刺激文を提示した。そして、その刺激文が絵に描かれている事象と合致しているかどうかを判断させた。尺度は7段階のリッカート尺度である。加えて、適当に回答されるのを避けるために、I don't know を付した。刺激文は複合名詞と弱い結果構文と強い結果構文の3項目およびフィラーである。各構文は(4)から(6)のように、4例ずつ示しており、これを各4つ提示した。したがって、刺激文が3構文×4例×4項目なので、48例であり、フィラーは2構文×4例×4項目なので、32例である。また、下線は特に注目してもらうようにと指示を出した箇所である。なお、実際の調査での例文の提示順および a, b, c, d の順番はランダムシャッフルしている。

(4) 複合名詞

- a. My sister is enjoying reading travel magazines.
- b. My sister is enjoying reading magazines of travel.
- c. My sister is enjoying reading magazines travel.
- d. My sister is enjoying reading travel of magazines.

(5) 弱い結果構文

- a. Mike painted the wall black.
- b. Mike painted the wall and made it black.
- c. Mike painted black the wall.
- d. Mike painted the wall was black.

(6) 強い結果構文

- a. John hammered the metal flat.
- b. John hammered the metal and made it flat.
- c. John hammered flat the metal.
- d. John hammered the metal was flat.

(4) は複合名詞を作ることができるかどうかを見るための例である。例えば、名詞と名詞を複合させて複合名詞を英語では作ることができないと判断する学習者 (= 複合パラメータをマイナスに設定した被験者) は、(4b) に示すように複合名詞ではなく名詞と名詞の間に of を入れて繋げる方法を好むと予測される。(4c) と (4d) は (4a) と (4b) における名詞を入れ替えたものであり提示する絵とは合致していないため容認されない。

(5) と (6) はそれぞれ弱い結果構文と強い結果構文を容認するかどうかを見るための例である。(5a) と (6a) が結果構文として容認される例である。

次に、(5b) と (6b) は (5a) と (6a) の結果構文が表す事象を迂言的に言い表した例である。柳澤 (2013) や平野 (2016, 2017) において日本人英語学習者は迂言的表現を好んでいたことが報告されているため、それが正しいかどうかを検証するために調査項目に入れている。

それから、(5c) と (6c) は動詞と二次述語を隣接させた例である。Snyder (2012) による複合パラメータに基づくと、主動詞 (e.g., paint) と二次述語 (e.g., black) が統語部門と意味部門のインターフェイスで形態的複合語を形成する。動詞と二次述語が隣接している (5c) や (6c) は、Heavy NP Shift により目的語が右方移動していると分析されるため完全に間違いというわけではない。実際、小説等で文語表現として使われることがある (William Snyder (p.c.))。この英語母語話者の容認性を日本人英語学習者が有しているかどうか検証する。

さらに、(5d) と (6d) は動詞が補部に時制句を選択しており容認されない例である。(5d) と (6d) のように、弱い結果構文と同じ構文を強い結果構文の調査項目にも入れることで、被験者が強い結果構文と弱い結果構文を区別できているかどうかを調査する。

4. 研究の成果

本研究では容認度判断課題を行うことで (3) に示した仮説が正しいかどうかを調査した。その結果、(3a) の仮説は支持された。弱い結果構文の習得の方が強い結果構文の習得よりも容易な理由には少なくとも2つあることを提案した。1つはパラメータの観点からの可能性である。2つ目は弱い結果構文と強い結果構文のインプット量の違いの可能性である。

次に、(3b) の仮説は支持されなかった。だが、初級群よりも中級下位群、中級下位群よりも中級上位群の方が相関があることが明らかになった。この結果について、本稿では、パラメータの設定により弱い結果構文と複合名詞が習得されるのであれば相関があるはずだが、相関はなく、また、徐々に相関係数が大きくなっていったため、日本人英語学習者による弱い結果構文と複合名詞の習得は複合パラメータの観点からはうまく説明できないと結論付けた。

研究3：クラウドソーシングを用いた第二言語習得研究

第二言語習得研究を行う場合、目標言語を現在学習している学習者の相当数の確保は容易ではない。対面式の調査を行う場合は、どうしても時間的・場所的な制約を受けてしまい、研究が期待するほど進展しないためである。しかし、その研究遂行上の課題を克服する可能性を秘めている媒体として、クラウドソーシングと呼ばれる「ネット上の不特定多数の群集に対して仕事を発注する仕組み（一瀬・團迫・木戸（2018b: 1）」）がある。このような雇用形態を第二言語習得研究の分野に応用し、クラウドソーシング会社に登録しているワーカーに対し調査の参加を呼びかけることで、これまで課題であった時間的・場所的制約から解放される可能性がある。ただ、クラウドソーシングで得られた調査データの信頼性については検討すべき課題である。特に、研究者が望む母語話者ではない者が「成りすまし」として調査に参加する恐れがあり、研究そのものの質が大きく疑われることにもなりかねない。したがって、できる限り「成りすまし」の可能性を排除した上で、対面式とクラウドソーシングによる調査結果を比較し、クラウドソーシングの調査データに信頼性があるかどうかを検証することは、今後の第二言語習得研究にとっても重要である。本研究では、一瀬・團迫・木戸（2018a）で行われた韓国語を母語とする日本語学習者の複合動詞に関する言語産出に焦点を当てる。この研究では、対面式調査を行っており、日本語の複合動詞を産出する際に、母語である韓国語の影響が現れることを述べている。本研究では、クラウドソーシングを用いて実験を行い、一瀬・團迫・木戸（2018a）と同質のデータが得られるかどうかを検証することを目的とする。

3. 研究の方法

株式会社クラウドワークスのサービスを用いて募集を行い、応じた者に対して実験を行った。募集の際の条件として、被験者は韓国語母語話者に限定するというを明示した。被験者に日本語の学習歴、日本で居住経験、両親の使用言語、日本語能力試験の資格の有無などを入力させた。また、韓国語母語話者であるかどうかに関する事前チェックを行い、それを満たさない被験者は除外した。その結果、被験者の総数は34名であった。また、日本語の習熟度テストの結果を基に上位グループ21名と下位グループ13名に分類した。なお、Google Formを利用し、「空所補充課題」「動詞の自他の区別に関するテスト」を行った。

<空所補充課題（一部）>

例(れい)にならって3つの動詞(どうし)から2つの動詞(どうし)を選(えら)んで適切(てきせつ)な形(かたち)に直(なお)し、下(した)の文(ぶん)を完(かん)成(せい)させて下(くだ)さい。

(例) 倒(たお)れる / 切(き)る / 倒(たお)す 私(わたし)が木(き)を切(き)り倒(たお)した。

1. 続(つづ)ける / 食(た)べる / 続(つづ)く 私(わたし)はお菓子(かし)を()。

<動詞の自他の区別に関するテスト（一部）>

a, bのうち、どちらがより自然(しぜん)だと思いますか。より自然(しぜん)だと思(おも)う文(ぶん)を選(えら)んでください。

1. a. ヨンヒが英語(えいご)の勉強(べんきょう)を続(つづ)いた。
b. ヨンヒが英語(えいご)の勉強(べんきょう)を続(つづ)けた。

4. 研究の成果

まず、選択式である自他の区別テストについては、調査手法に関係なく似た傾向が得られた。どちらの調査も、上位グループの方が下位グループに比べて正答率が高いという結果が得られており、自他の区別テストについてはクラウドソーシングによる調査も有効であることを示している。次に、空所補充課題の「食べ続いた」などの「V2（後項動詞のこと。ここでは「続いた」）の誤用」については、対面式と同様にクラウドソーシングでも30例（上位グループ15例、下位グループ15例）が観察された。同じタイプの誤用が一定程度観察されたことは、この方式による調査の妥当性を示すものと考えられる。「V2の誤用」については対面式でもクラウドソーシングでも同質のデータが得られたと考えてよいであろう。一方で、母語である韓国語の影響が見られるかどうかを検証する「副詞+動詞」型の誤用について比較をすると、クラウドソーシングによる非対面式では上位グループと下位グループともに1例ずつしか観察されなかった。加えて、「食べり続けた」などの活用の誤りである「V1（前項動詞のこと。ここでは「食べる」）の誤用」については、対面式では下位グループで観察されていたが、今回の実験では全く観察されなかった。このような言語の形態的な側面についての記述回答を求める設問ではクラウドソーシングによる調査は有効ではない可能性がある。以上のように、本研究によって、クラウドソーシングによる調査は、特に語や表現の形態的な部分を自由記述によって回答を求めた場合には、対面式の質問紙法では想定し得ない問題に直面することがあることが明らかになった。その一方で、選択式による回答を求める場合は、対面式とほとんど変わらない結果が得られており、この方法による調査の妥当性が示された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 木戸康人・團迫雅彦・一瀬陽子	4. 巻 10(1)
2. 論文標題 日本人英語学習者による結果構文の習得 - 複合パラメータとの関係性を手掛かりに-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近畿大学教養・外国語教育センター紀要（外国語編）	6. 最初と最後の頁 23-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 團迫雅彦・木戸康人・一瀬陽子	4. 巻 134
2. 論文標題 クラウドソーシングを利用した第二言語習得研究：韓国語を母語とする日本語学習者の統語的複合動詞の産出に注目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 比較文化研究	6. 最初と最後の頁 23-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 團迫雅彦	4. 巻 35
2. 論文標題 英語の母語獲得過程における助動詞doの一致：パラメータの連動という観点から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 九州英文学研究	6. 最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木戸康人	4. 巻 -
2. 論文標題 日本語複合語の獲得 - 音韻論的特性を手掛かりにして	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語科学会	6. 最初と最後の頁 43-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 一瀬陽子・團迫雅彦・木戸康人	4. 巻 第132号
2. 論文標題 第二言語習得研究におけるクラウドソーシング利用の可能性についての考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 比較文化研究	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木戸康人・團迫雅彦・一瀬陽子	4. 巻 第9巻・第2号
2. 論文標題 日本語学習者の中間言語 韓国人日本語学習者による統語的複合動詞の習得の観点から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 近畿大学教養・外国語教育センター紀要 (外国語編)	6. 最初と最後の頁 117-141
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木戸康人	4. 巻 第38号
2. 論文標題 On the Relation between Lexical V-V Compounds and the Compounding Parameter	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 KLS	6. 最初と最後の頁 73-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 團迫雅彦	4. 巻 -
2. 論文標題 英語の母語獲得過程におけるSubject-Verb Agreementの非対称性とその統語分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本英文学会九州支部第70回大会Proceedings	6. 最初と最後の頁 335-336
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 團迫雅彦	4. 巻 -
2. 論文標題 日本語を母語とする幼児の右方転位文における主語の格標示について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本言語学会第156回大会	6. 最初と最後の頁 87-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 一瀬陽子・團迫雅彦・木戸康人	4. 巻 -
2. 論文標題 韓国語母語話者日本語学習者および中国語母語話者日本語学習者における複合動詞の習得	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ことばを編む	6. 最初と最後の頁 62-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 團迫雅彦	4. 巻 -
2. 論文標題 子どものことばから大人の文法が見える！ 日本語の主語の格助詞に注目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 外国語の非 常識 ことばの真実と謎を追い求めて	6. 最初と最後の頁 77-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木戸康人	4. 巻 11
2. 論文標題 統語的複合動詞 V+疲れる について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 神戸言語学論叢	6. 最初と最後の頁 14-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yasuhito Kido	4. 巻 52
2. 論文標題 On the Syntactic Structure of Bai and Tai	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本語学論説資料	6. 最初と最後の頁 424-435
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 團迫雅彦	4. 巻 -
2. 論文標題 日本語を母語として獲得する幼児のTPについて：動詞互換・活用語尾・主格に注目して	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本言語学会第155回大会予稿集	6. 最初と最後の頁 366-367
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yasuhito Kido	4. 巻 -
2. 論文標題 On the Acquisition of V-V Compounds in Child Japanese: An Empirical Study Using CHILDES.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 JSL2017	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 團迫雅彦	4. 巻 -
2. 論文標題 主文における主語の形態的具現化：ヨブ時の属格主語と熊本方言の比較から	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本言語学会第154回大会予稿集	6. 最初と最後の頁 224-229
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 團迫雅彦	4. 巻 1
2. 論文標題 理由を表すwh付加詞と補文標識「の」の獲得	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本言語学会第153回大会予稿集	6. 最初と最後の頁 454-457
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 一瀬陽子	4. 巻 122
2. 論文標題 大学教育におけるPBL導入の試み	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 比較文化研究	6. 最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 木戸康人
2. 発表標題 日本語名詞修飾構文の獲得
3. 学会等名 Prosody and Grammar Festa (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 木戸康人
2. 発表標題 英語母語幼児による結果構文の獲得
3. 学会等名 令和元年第14回大会日本英文学会関西支部 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木戸康人
2. 発表標題 幼児における「ノ」の過剰一般化－連結標識仮説－
3. 学会等名 関西言語学会第44回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木戸康人
2. 発表標題 日本語複合動詞の獲得－音韻的特性を手掛かりにして－
3. 学会等名 言語科学会2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kido, Yasuhito
2. 発表標題 The Course of Verb Acquisition in Child Japanese: Evidence from Lexical Semantics
3. 学会等名 The Second International Conference on Theoretical East Asian Psycholinguistics
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kido, Yasuhito
2. 発表標題 Acquisition of Resultative Construction in Child English
3. 学会等名 神戸大学言語学研究室年未発表会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kido, Yasuhito
2. 発表標題 The Acquisition of Complex Predicates in Child English and Japanese
3. 学会等名 兵庫教育大学平成30年度第2回研究発表会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Dansako, Masahiko
2. 発表標題 Right Dislocation and Subject Case Marking in Child Japanese
3. 学会等名 Generative Approaches Language Acquisition in North America (GALANA 8)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kido, Yasuhito
2. 発表標題 Acquisition of Japanese Compound Verbs
3. 学会等名 兵庫教育大学人文学部主催言語学講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 團迫雅彦
2. 発表標題 日本語を母語とする幼児の右方転位文における主語の格標示について
3. 学会等名 日本言語学会第156回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 團迫雅彦
2. 発表標題 幼児の「誤用」の属格主語とその用法についての統語分析
3. 学会等名 言語科学会第20回年次国際大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Dansako, Masahiko
2. 発表標題 Right Dislocation and Subject Case Marking in Child Japanese, Generative Approaches to Language Acquisition
3. 学会等名 GALANA 8 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kido, Yasuhito
2. 発表標題 The Acquisition of Complex Predicates in Child English and Japanese
3. 学会等名 庫教育大学 言語表現学会・平成30年度第2回研究発表会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 團迫雅彦
2. 発表標題 英語の母語獲得過程におけるSubject-Verb Agreementの非対称性とその統語分析
3. 学会等名 日本英文学会九州支部第70回大会シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 團迫雅彦
2. 発表標題 日本語を母語として獲得する幼児の TP について：動詞語幹・活用語尾・主格に注目して
3. 学会等名 日本言語学会第155回大会,
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木戸康人
2. 発表標題 語彙的複合動詞と複合語パラメータの関連性について
3. 学会等名 関西言語学会第42回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木戸康人
2. 発表標題 統語的複合動詞V + 疲れる について
3. 学会等名 日本言語学会第154回
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yasuhito Kido
2. 発表標題 On the acquisition of V-V compounds in child Japanese: An empirical study using CHILDES.
3. 学会等名 The Japanese Society for Language Sciences 19th Annual International Conference
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 團迫雅彦
2. 発表標題 理由を表すwh付加詞と補文標識「の」の獲得
3. 学会等名 日本言語学会第153回大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 岸本秀樹・有働眞理子・眞野美穂・木戸康人・前田晃寿	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 323
3. 書名 接続詞と句読法	

1. 著者名 中谷 健太郎、青木 奈律乃、浅原 正幸、木戸 康人、田中 幹大、中野 陽子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 296
3. 書名 パソコンがあればできる！ ことばの実験研究の方法	

1. 著者名 編集：小笠原 真司、廣江 顕 分担著者：團迫 雅彦	4. 発行年 2018年
2. 出版社 英宝社	5. 総ページ数 192
3. 書名 外国語の非一常識 ことばの眞実と謎を追い求めて	

1. 著者名 編集：西岡 宣明、福田 稔、松瀬 憲司、長谷 信夫、緒方 隆文、橋本 美喜男、分担著者：一瀬 陽子、團迫 雅彦、木戸 康人	4. 発行年 2018年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 448
3. 書名 ことばを編む	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	團迫 雅彦 (Dansako Masahiko) (50581534)	九州大学・人文科学研究院・専門研究員 (17102)	
研究 分担者	木戸 康人 (Kido Yasuhito) (30800841)	神戸大学・人文学研究科・特別研究員(PD) (14501)	